

7月下旬～8月中旬を目標とすべきであるが各地においてそれぞれ孢子の放出を確認して事業を行う事は必要である。

今回の調査は前述の如く資料が少く予備調査の範囲にとどまったがなお調査を継続して地理的な相異水温との関係等について詳細に究明して行きたい。

最後に資料の提供を賜った垂水、根占、里、羽島、笠沙、西之表、島間、宮ノ浦の各漁業協同組合に謝意を表する。

合成繊維と竹繊維による海苔養殖試験

前 田、永 山

目 的 合成繊維がのり網としての適性試験が行われているが結果は必ずしも一致せず未だ全面的に実用化されるまでに至っていない。本年度はクレハロン、と、エンピロン、及び本県特産、竹繊維網及び従来用いられているパームを使用し着生、耐久の比較試験を行つた。

方 法 本場甲突川尻試験地に各網共昭和31年11月8日同時に張込み、高さは漁場に設置した標尺の50cm～60cmの範囲（4時間～4時間30分干出線）とし同一条件下においた。摘採した海苔は水切後の目方によつて各網の収穫量を比較した。

経 過 10月20日出水市米之津漁場に種付張込み、11月7日取揚げ試験地甲突川尻漁場へ運搬同8日張込み。

芽付は平年並で附着数はパームが最も優れ、竹繊維クレハロンがこれに次ぎエンピロンが最も少い。

のり芽附着状況

	網ひび種別	取揚月日	1cm間の芽数	発芽状況
試 験 区	クレハロン	11月7日	10	普 通
	エンピロン	〃	2.5	少 い
	竹 繊 維	〃	7	普 通
対 称 区	パ ー ム	〃	30	多 い

11月中旬（15日）肉眼確認3mm、12月中旬生育は合成繊維特にエンピロンはやゝ遅れたが各細共に5cm～10cmに達し以降急速に伸長した。

生 育 状 況

		のりの長さ	生育状態	摘 要
試 験 区	クレハロン	3 cm	疎	クレハロンより疎
	エンピロン	3 cm	疎	
	竹 繊 維	10 cm	濃 密	
対 称 区	パ ー ム	5 cm	濃 い	

摘採は才1回12月13日才2回26日、合成繊維は生育が遅れたため才1回12月26日才2回1月21日合計収穫量(4尺×10間換算)からみると、試験区の竹繊維が最も優れ、対称区のパーム、試験区のクレハロン、エンピロンの順となっている。

摘 採 量 (4尺×10間換算)

		才1回摘採	才2回摘採	計
試 験 区	クレハロン	1,4メ (84枚)	1,2メ (72枚)	2,6メ (156枚)
	エンピロン	1,0メ (60枚)	1,1メ (66枚)	2,1メ (126枚)
対 称 区	竹 繊 維	5,7メ (342枚)	1,5メ (90枚)	7,2メ (432枚)
	パ ー ム	2,7メ (162枚)	1,7メ (102枚)	4,4メ (264枚)

考 察 1月14、15日突風のため全施設が流失、2回しか摘採出来なかつたが収穫量からみると試験区の竹繊維が最も良い成績を収め、対称区パームの1.6倍クレハロンで6割、エンピロンで5割で化学繊維は余り良い結果は得られなかつた。これは孢子付及び養殖水位等が対称区のパームで行う従来の方法で行つたため水切れの早い合成繊維には不適であつたことに起因すると思われる。竹繊維が最も良い成績を収めてはいるが耐久力が弱くせいぜい1年の使用にしか耐えず本県のように風波の強い漁場の場合、一漁期中に既に目が切れる欠点がある。合成繊維は共に軽量で運搬には便利であるが、これら合成繊維はパームと同水位での養殖法をとる限り、優良な成績は得られないようである。

甲 突 川 尻 潮 間 観 測

前田、永山、九万田

海苔ひび建込み及び養殖のための基礎資料を得るため甲突川尻において潮間測を行つた。

調 査 日 時

昭和31年9月22日8時～12時

方 法 及 び 調 査 項 目

原測として一時間毎に観測し満潮時、低潮時には特に観測を実施した。

項 目 気象 天候 気温 曇量 風向 風力
海象 水温 比重 潮位 潮向 潮速 水色

方 法 気象、海象の基準方法は海洋観測法に據つた。

潮位は現地に標尺杭(10廻刻み標尺)を建てて記録した。